

プログラム・ノート

八木宏之

ロベルト・シューマン(1810～56)のピアノ独奏曲のなかでもとりわけ名高い『**子どもの情景**』は、1838年3月に12の小品からなる曲集として完成し、後に第13曲「詩人は語る」が追加された。『**子どもの情景**』は子どもが演奏するための作品ではなく、大人の視点から子どもたちの童心を描いたものである。本日はフルートとハーブに優れた作品を数多く残したフランスの作曲家、ジャン=ミシェル・ダマーズ(1928～2013)による編曲版を抜粋でお楽しみいただく。

シューマンのオーボエとピアノのための『**3つのロマンス**』は、1849年12月に妻クララへのクリスマス・プレゼントとして作曲された。同じ年、シューマンはホルンやクラリネット、チェロといった独奏楽器とピアノのための室内楽作品を集中的に作曲しており、この曲もそのうちのひとつである。3つの楽章はいずれもシンプルな三部形式からなる。オーボエの果てしなく続く息の長いフレーズとふたつの楽器の濃密な対話は、ロマン派の室内楽の真髄というべきものだ。

武満徹(1930～96)の『**海へ**』は、アルト・フルートとギターのための作品として1981年に完成し、その後、演奏形態の異なる3つのバージョンが作られた。本日演奏されるのは、1989年に書かれたアルト・フルートとハーブのためのバージョン、『**海へⅢ**』である。作品は3曲からなり、環境保護団体グリーンピースの委嘱によって書かれた「夜」に、武満の自然に対する考えをより明確に示す「白鯨」と「鱈岬」が続く。『**海へ**』は水をテーマにしている点や、調性を感じさせる響き(武満はそれを「調性の海」と呼んだ)を持つ点で、80年代の武満のスタイルを代表する作品と言えるだろう。「Es(S)-E-A」の3音による海(Sea)のモチーフが、全曲を通じて繰り返し登場する。

クロード・ドビュッシー(1862～1918)の4手ピアノのための『**小組曲**』は、ロココ時代の画家、アントワーヌ・ヴァトーの絵画や、象徴派の詩人、ポール・ヴェルレーヌの詩集『**艶なる宴**』からインスピレーションを得て、1886年から89年にかけて作曲された。第1曲のタイトル「**小舟にて**」も『**艶なる宴**』に収められた同名詩から取られており、優雅な小舟が水の上を軽やかに漂っていく。

20世紀のイギリスを代表するフルート奏者、作曲家のひとり、ウィリアム・オルウィン(1905～85)は、10歳にも満たない幼少期から作曲を始め、交響曲から映画音楽まで、様々なジャンルに作品を残した。彼はラヴェルやルーセルといったフランスの作曲家たちの室内楽作品をイギリスに紹介したことで知られる。1971年に作曲された**幻想的ソナタ『水の妖精』**は、イギリスの気品とフランスの色彩を巧みに織り交ぜたオルウィンの書法が顕著に感じられる作品で、ギリシャ神話に登場する川や泉の妖精、ナーイアスをフルートとハーブが劇的に描き出していく。

(やぎ ひろゆき・音楽評論)